竹内修身（たけうち おさみ）

学位の種類	博士（文学）
学位記番号	文第198号
学位授与年月日	平成14年12月12日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	**メルロ＝ポンティの前・中期思想**
論文審査委員	（主査） 教授野家啓一　教授篠　憲二 教授清水哲郎

論文内容の要旨

本論の目的は、晩年のメルロ＝ポンティにおいて生じた転回と言ってもよいような出来事が何によって動機づけられていたかを明らかにすることである。そのため私は、晩年の思想に達するまでのメルロ＝ポンティに見られる幾つかの著書、講義、草稿を取り上げ、それについて比較的丁寧な読解を試みた。以下述べるところは、そうした目的を達成するために私が行った読解のあらましである。

メルロ＝ポンティは、『行動の構造』の序論のなかで、われわれの置かれている思想状況に触れながら、次のようなことを述べている。われわれは、今でも相変わらず何の解決も見ないまま並存している二つの対立的な人間観をもっている。その一つは科学的な人間観であって、それによると人間は徹頭徹尾、生理学的、心理学的、社会学的に規定されている。もう一つは主知主義的な人間観であって、それによると人間は、少なくとも意識としては、そうした繋縛から自由な超越論的主観である。したがって人間は、超越論的意識たるかぎりでは、おのれの経験的存在を含む全自然を公平無私に眺めやることができる。客観性を目ざす科学が可能になるのも、科学研究を行うわれわれがそうした意識だからだ、というわけである。しかし、それにしてもわれわれは、このような対立し合う二つの人間観が並存している矛盾した状況をそのまま放置しておいてもよいのだろうか。『行動の構造』が目論んでいるのは、こうした矛盾した状況を解消することである。そのためメルロ＝ポンティは、これら二つの人間観を共に可能にしている共通の地盤に立ち帰ろうとする。そして彼は、「構造」と「基づけ」という概念を駆使しながら、生理学的、心理学的、社会学的に規定されているわれわれと一切の繋縛から自由に世界を眺めやることができるわれわれという二つの在り方を共に理解可能になるような仕

方で、繋ぎ合わせようとするのである。その際、メルロ＝ポンティが取った戦略は、超越論的意識のうちに身を置きながら、この場合には全自然を冷徹に観察する科学者の観点に身を置きながら、人間や動物の行う行動を分析することによって、この問題に接近するというものである。したがって彼は、行動主義の創始者ワトソンと同様、われわれに観察される人間や動物の背後に意識とか心といったものをあらかじめ仮定しない。彼が前提するのは、一定の環境に置かれた身体が行うさまざまな運動だけである。そして、それらの運動がどう考えられれば理解可能になるのかという課題をおのれに課するのである。もっとも、彼がそうしたのは、そうすることによって結局はおのれの内的原理に従って行動している人間や動物の実存が開示されるはずだったからである。彼によれば、ワトソンが身体の運動に定位することによって垣間見たのも、実はそうした実存だったのである。ところがメルロ＝ポンティによれば、ワトソンにあっては、行動の直観にあった深く正しいものは、その貧弱な哲学のために直ちに失われてしまう。なぜならワトソンは、意識か物かという古典的な二者択一しか知らなかったため、意識を心理学から追放した後で、直ちに次のようなことを自明なことだとみなしてしまったからである。すなわち、身体の運動は物の運動と何ら異なるものではないということ、したがってそれは物理学的に説明されうるものだ、というのがそれである。しかも、ワトソンが知っていた物理学は、自然を原子論的・機械論的に説明するガリレイ－ニュートン流の古い物理学でしかなかった。だから彼にあっては、次のことも、あらかじめ自明なことだとみなされてしまう。すなわち、身体の運動は、原子論的・機械論的に説明されうるものだ、というのがそれである。こうしてワトソンにあっては、身体はその表面上に分布されている一つ一つの点的受容器からそれぞれの効果器にまで達する多数の孤立した回路を埋め込まれた機械装置以外の何ものでもないとされてしまう。そして、身体の行う運動も、外界からやって来る物理的刺激がそれぞれの受容器を叩くことによって引き起こす要素的諸運動の総和以外の何ものでもないとされてしまうのである。

しかし、このような原子論的・機械論的説明が受け入れられるであろうか。そのような説明が維持されないということは、現代の生理学によって明らかにされた諸事実を見れば明らかである。たとえば、反射のレベルにおいてさえ、複合的刺激に対する有機体の反応は、その刺激を構成している一つ一つの要素的刺激が引き起こすはずの要素的反応の総和として現われてくるわけではない。この複合的刺激は、その布置に応じて、質的に異なった全体的反応を引き起こすのである。のみならず、〈一定の点的受容器に与えられる一定の点的刺激が常に一定の反射運動を引き起こすはずだ〉という根本的仮定が事実に即応するものではない。なぜならこの反射運動は、その点的刺激がどのような刺激の布置に置かれているかに応じても、また当該の反射弓がそのなかに置かれている身体の内的状態がどうなっているかに応じても、さらには先行的反応や同時的反応がどのようなものかに応じても、異なったものとして現われてくるからである。要するに、われわれが目撃するのは、一定の刺激を与えられた有機体が、その刺激の置かれている内外の全文脈をあたかも〈考慮に入れている〉とでも言わんばかりに、その文脈に応じてそのつど反射を決定しているといった事態である。こうした事態は、一定の刺激にいつも一定の運動でもって応える有機体というものを仮定しているような理論でもっては到底説明のつくようなものではないのである。とはいえ、有機体が状況全体を知的に計算に入れ、おのれが何をなすべきかを決定しているといった風に考えることもできない。なぜなら、そうであれば、有機体はかなり複雑な計算をしていることになるのだから、反応に移るまでにかなり

長い時間を要するはずであるが、反射は実際には一瞬のうちになされるものだからである。そこでメルロ＝ポンティは、ゲシュタルト心理学に従いながら、反射を次のように考えようとする。そもそも身体とは、ワトソンの考えたような機械装置ではなく、外界からやって来る諸力と身体の内部からやって来る諸力を常に一定の平衡状態に保とうとするような系である。したがって身体は、その平衡状態が何らかの事情で破られれば、そのつど状況に応じて異なった過程を辿りながらも、その平衡状態を回復しようとするであろう。そして、その過程が身体の運動という形をとって現われてきたものが反射と呼ばれているものにほかならない、と。こうしてメルロ＝ポンティにあっては、たとえば暗闇で網膜の周辺部に光点が現われると、反射的にそちらの方に目を向けるいわゆる凝視反射といったものも、光点の出現によって感覚領域の平衡状態が破られ、そこに緊張状態が生ずるが、この緊張状態が光点を網膜の機能的中心部にもってこようとする凝視運動によって解消される、といったように解されることになる。そして、学習の結果、得られるような高等な行動も、反射と同じように平衡状態を回復するために発動される身体の運動、ただし生得的なレベルで問題になるような平衡状態ではなく、これを再組織化することによって得られるような新しい平衡状態を回復するために発動される運動と解されるようになるのである。

とはいえメルロ＝ポンティによれば、このような素晴しい着想を与えてくれたゲシュタルト心理学にも問題点がある。なぜならそれは、物理学的言語によって語られるものだけが真の実在だという偏見に囚われていたため、物理的世界のなかにも神経系と同じようなゲシュタルトないし構造が見出されるということから、身体によって実現されるゲシュタルトも一種の複雑な物理的ゲシュタルトとみなし、こうして事実に即すことをやめてしまったからである。メルロ＝ポンティがゲシュタルト心理学と対決する形で「生命的構造」や「人間的秩序」という概念を持ち出してきたのも、このためである。彼によれば、人間や動物によって実現される構造は、物理的系によって実現される構造には還元されないのである。こうしてメルロ＝ポンティは、まず物理的系の行う運動が現存の物理的諸条件によって受動的に決定されるような物理的平衡を目ざす系の運動と考えられたときに理解されるのに対して、動物の行う運動は生命の維持・発展という生命的平衡を目ざす系の運動と考えられた場合にのみはじめて理解可能になるのだということを示そうとする。そして、人間の行う運動も、さしあたっては社会的・文化的平衡を目ざす系の運動として、さらに発展していけば、超越論的生とも言うべき格別な平衡状態を目ざす系の運動として考えられた場合にのみはじめて理解可能になるのだということを示そうとするのである。もっとも、そうは言っても、彼の狙いはただ単に、物理的系や動物、人間の行う運動を観察しながら、これらの構造を区別するところにあったのではない。むしろ彼の真の狙いは、人間的構造を生命的構造の再構造化の結果として、また生命的構造を物理的構造の再構造化の結果として捉えるところにあった。彼は、これら三つの構造を〈再構造化を繰り返しながら次第に統合のレベルが高まっていくただひとつのゲシュタルトの運動〉の諸段階として捉えることによって、物理的構造と生命的構造を人間的構造のうちに、さらにはそれら三つの構造を、社会的存在者としての人間から出発しながらも再構造化を行うことで人間的構造の頂点に出現してくると考えられる超越論的主観のうちに取り込もうとしていたのである。その際、彼の語る再構造化とは、丁度これまであった文章に続く新しい文章が、これまであった文章をおのれのうちに含みながらも、それを新しい文脈に取り込むことによって、それに対して徹底的に新しい意味を与えるのと同じように、後に続く段階が、先行する段階をおのれの

うちに含みながらも、それを新しい全体のなかに統合することによって、それに対して徹底的に新しい機能と意味を与える再組織化のことである。こうした再組織化にあっては、後に続く段階は、先行する段階を昇華するだけであって、廃棄するわけではない。だから、再構造化の頂点に出現する超越論的主観は、変様された形であるにせよ、社会的存在者としての人間を、またそれを通して生命的構造を、そしてさらにはそれを通して物理的構造を含むということにもなるのである。

もっとも、そうは言っても、物理的構造や生命的構造が人間の存在そのもののうちに含まれているということは、容易に納得されないかもしれない。しかし人間的構造も、何らかの事情で解体することがあろう。上の見解の正しさが立証されるのはまさにそのときなのだ、とメルロ＝ポンティは言う。なぜなら、そのとき人間は、死にゆく病人がそうであるように、動物と殆ど変わらぬ運動しか行わなくなったり、さらに解体が進めば、物理的系と殆ど変わらぬ運動しか行わなくなったりするまでに至るからである。したがってメルロ＝ポンティは、物理的構造や生命的構造に還元されない人間的構造も、それらに基づけられて出現してきたものなのだと言う。そして、通常われわれに観察される人間は、その最も深い基底としては物理的構造を内蔵しながらも、直接的には生命的構造に基づけられながら、社会的存在者としての自己を再構造化することで超越論的主観に向かわんとする存在者として現われてくるのだと言うのである。してみれば、一方で人間がなぜ生理学的、心理学的、社会学的に規定されていると言われるのかも、理解されよう。また、人間がなぜ超越論的主観だと言われるのかも、理解される。そしてメルロ＝ポンティによれば、これら二つの在り方をひそかに繋ぎ合わせているものこそ、再構造化を通して自己を高めていこうとする人間的実存の超越の運動にほかならないのである。

が、それはともかく、このように見てくれば、すでにこの時期からメルロ＝ポンティが哲学について次のような考えをもっていたということがわかる。すなわち、哲学というものは、超越論的主観としての哲学者が、おのれを可能にしてくれた来歴の一つ一つを辿り直しながら、おのれがまさにこのような超越論的主観として現われてくる瞬間を見届けたところで、その円環を閉じる反省作業にほかならない、というのがそれである。『行動の構造』を導いていたのは、このような哲学観だったのである。そしてこの哲学観、プルーストの『失われた時を求めて』にも似たこの哲学観が、直ちに第二のサイクルを引き起こすことになる。『知覚の現象学』から言語論に至るメルロ＝ポンティの歩みを規定していたのも、実はこうした哲学観だったのである。実際、彼が『知覚の現象学』を企てたのは、社会的存在者として生きているわれわれを直接的に基づけている生命的構造を知覚的生という形でもう一度問題にしたかったからだと言うことができよう。また、これに引き続いて彼が言語論を展開したのも、一定の文化的社会のなかに取り込まれて生きているわれわれが、言語という奇妙な道具を駆使しながら、どのようにしておのれの特殊性を乗り越え、普遍的な超越論的主観にまでたどり着くのかを見届けようとしたからにほかならない。こうして『知覚の現象学』とその後の言語論は、『行動の構造』の場合と同様、全体として〈生命的構造に基づけられながら社会的存在者として生きているわれわれが再構造化を通して超越論的主観に向かっていくその超越の運動〉を反省的に捉え直そうという試みをなしていたと言うことができるのである。ただ、このように見れば、『行動の構造』と殆ど変わらぬメルロ＝ポンティのこの企投にも、『行動の構造』からはっきりと区別される点が一つだけある。それは、彼がもはや「外的観察者」の立場に立とうとしなくなった

という点である。彼は、人間の経験の内部に身を置こうと努める。そして彼は、こうした人間の経験を可能なかぎり当の人間によって生きられている通りのその姿で復元することをおのれの準則としながら、われわれの超越の運動を内側から追跡しようとするのである。

こうして、まずさしあたっては、生命的構造を解明するために、知覚が取り上げられる。知覚は、呼吸や血液の循環と同様、われわれが常に自明なものとして当てにしているが、われわれが自分の責任のもとに営んでいるわけではない〈生命的存在者としての身体の生〉に属する出来事だからである。実際、知覚はいつでも、意志的で人称的な実存としてのわれわれの手前で生起するものであろう。それは、われわれの手前にいる誰かによって営まれているような作業として、われわれが自覚したときにはすでに作動していたし、またわれわれが自覚的におのれの生をいきるようになった後でもこのようなわれわれの奥底で作動し続けることをやめない前人称的生の流れと、その生の「主体」とも言うべきわれわれの身体を範例的に開示してくれるのである。もっとも、そうは言ってもメルロ＝ポンティによれば、われわれが知覚をそのようなものとして捉えることは、稀れである。なぜならわれわれは、われわれの知覚経験を正しく見ることを妨げる科学的偏見、すなわち〈知覚とは、物理学的世界からやって来た刺激が物理学的客観としての身体に作用することによって生じた結果にほかならない〉とするような科学的偏見にあまりにも深く囚われすぎてしまっているからである。メルロ＝ポンティが『知覚の現象学』のなかで、ゲシュタルト心理学を利用しながら、まずは知覚を諸感覚の総和とするような古典科学の知覚理論を、次いでこの知覚理論を救い出すために「連合」とか「判断」といった補助概念を持ち込んでくる経験主義や主知主義の知覚理論を批判していたのも、このためである。ゲシュタルト心理学が見事に示したように、われわれに生きられているがままの知覚野は、いつもすでに何らかの仕方で形態化された知覚野であって、これらの理論が考えるような感覚的諸性質のモザイクからなる知覚野などではないのである。

とはいえメルロ＝ポンティは、ゲシュタルト心理学に依拠しながら、これらの理論を一掃すれば、それで事が済むと考えていたわけではない。なぜならゲシュタルト心理学も、あの科学的偏見を共有していたため、結局はわれわれの知覚経験に即応しない恣意的な知覚理論しか提供しえなかったからである。彼がわれわれの知覚経験に立ち帰って、それをよく見ることの必要性を訴えていたのも、このためである。彼の考えでは、そうすれば、次のようなことが明らかになるのである。すなわち、知覚とは感覚－運動的主体としてのわれわれの身体がおのれを襲う感覚的なものと共存しうるような平衡状態を目ざすことによって始元的世界とも言うべき知覚世界をおのれに与える作業だ、というのがそれである。その際、メルロ＝ポンティが平衡状態ということで考えていたのは、鮮明な光景が得られたときに達成されるような平衡状態である。しかるに、この鮮明な光景こそ、結局のところ「客観的世界」と呼ばれているものにほかならない。したがって身体は、本質的に客観的世界を目ざす。こうしてメルロ＝ポンティにあっては、客観的世界がわれわれの意識の目的論の目標として課せられていると言われることになるわけである。もっとも、彼によれば、われわれの身体は、われわれを客観的世界の一歩手前のところまで導いていってくれるとはいえ、それを真に措定するわけではない。われわれが客観的世界を措定するような超越論的主観になりうるのは、実はこの客観的世界を覆い隠すような形で直ちに構成されることになる主観的・相対的な人間的世界を通してなのである。したがって、われわれが客観的世界をどのようにして措定するのかを知るためにも、われわれがこの人間的世界をいかに生きているのかを知る必要がある。こうしてメルロ＝ポンティの関心

は、滑るように人間的世界へと向かっていく。そして彼は、この世界が何よりもまずそれの地平として現われてくるところの他人を取り上げ、私にとって他人経験がどうして可能になるのかを解明しようとするのである。

してみれば、メルロ＝ポンティにあって他人経験に関する議論がなぜ『知覚の現象学』後に集中的に現われてくるのかということも、理解されよう。彼がその問題を主題的に論ずるようになるのは、主にソルボンヌの講義においてなのである。とはいえメルロ＝ポンティは、『知覚の現象学』においても、この問題に触れていなかったわけではない。なぜなら、他人経験が理解可能になるのは、この私を知覚論のレベルに置き直した場合だけだと考えられていたからである。実際、主知主義的哲学がそうしているように、もしこの私をはじめから自分の身体でさえも世界のただ中に置かれた一対象として眺めやるようなコギトと考えてしまうならば、この問題は解決されないであろう。なぜなら、そうなれば、他人もその身体とは何の内的関わりももたない他のコギトと考えなければならないことになるが、私が他人に関して経験しうるものは或る意味ではその身体だけにすぎないからである。他人がその身体とは無縁なもう一つのコギトと考えられるかぎり、たとえ他人の身体が私の経験領野に現われたとしても、私にはそこに他人が存在していると信じなければならない理由は何一つとしてないのである。ところが、もし私を知覚のレベルに置き直すならば、事情は一変する。なぜなら、そうなれば、他人はもう一人の知覚主体としてその身体との内的絆を回復するようになるからである。実際、知覚を反省する私から見て、この知覚する私がそれなしには他の諸物も存在しなくなってしまうような身体を引きずっていると思えるのだとすれば、私の知覚する他の身体がそれとは逆になぜ意識によって住みつかれていてはならないのか。勿論、私がそう考えるようになるためには、私の見ている他の身体は無活動の身体であってはならない。その場合には、私はそれを物とみなすこともできるからである。しかし、それがほんの少しでも特徴的な運動を行いさえすれば、私はそれをもはや物とみなすことができなくなる。それは、私の前で忽ち生気を帯びてくる。それは、私の身体と同じように、この世界の刺激をおのれの上に感じ取り、それに対してしかるべく行動している身体となる。こうして私は、そこにこの世界を知覚しているもう一人の主体が立ち現われてくるのを見るのである。

その際、メルロ＝ポンティによれば、私は別に「類推による推論」といったような知的解釈作業を行っているわけではない。とはいえ他人の志向は、物の色がその物のうちに端的に見られるように、身体のうちに端的に見られるというのでもない。メルロ＝ポンティによれば、他人知覚とは、私の身体による他人の身体の捉え直しのことである。私の身体が他人の身体の行う運動をおのれの内的可能性として生き直しながら、それの生きている世界に合流すること、それが他人を知覚するということなのである。が、それにしても、このようにして捉えられた他人を真の他人と言うのは、早計ではあるまいか。なぜなら、私に喜びの身振りとか悲しみの身振りと信じさせるような運動というのであれば、ロボットでもこれを行うことができるからである。してみれば、真の他人知覚は、単に彼の行う運動を見ながら、これを悲しみや喜びの身振りとして捉えるといったことではありえない。もし私の見ているのがロボットではなく、人間であるとすれば、私はそこに〈この所作を悲しみや喜びとして生き、そうしたおのれの在り方に内側から立ち合っている自己〉といったものを認めるのでなければならない。そうした条件のもとでのみ、私の見ている他人は真に他人と言いうるようなものになるのである。ところが、そうなると、他人知覚は忽ち困難に陥ることになる。なぜなら私は、そうした〈自己の

自己への現前〉を自分以外のどこにも認めることができないからである。

しかしメルロ＝ポンティは、こうした困難を前にしても、それをものともしない。彼は、端的に次のように主張する。たとえ他人知覚が理論上不可能であっても、他人は私にとっては否定しがたい事実である。他人の存在は、彼についての私の認識が不完全なときでも、私の生の地平にあっては異論の余地のないものだ、と。が、それにしても、われわれはただこのように主張するだけで満足してよいものなのだろうか。むしろ、われわれの経験の意味を理解しようと努める哲学者としては、真の意味での他人知覚が理論上では不可能なのに、それにもかかわらずなぜ他人の存在がわれわれにとっては異論の余地のないものであり、社会がわれわれの生の地平になるのかと問うべきなのではあるまいか。たとえ明言されているわけではないにせよ、『知覚の現象学』後のメルロ＝ポンティを襲ったのは、この問題意識である。そして、この問題の考察がやがて彼の思想全体の再編成を促すことになるのである。ただこの問題は、ソルボンヌの講義で簡単に触れられることはあっても、真正面から取り上げられない。彼は、この問題をやり過ごす。そして、自分の哲学の完成を急ぐかのように、われわれの人間関係のなかでも最も優れた人間関係、すなわち言語的人間関係を取り上げながら、言語がどうして語り手をも聞き手をもその特殊性から一気に引き抜いて、われわれを超越論的主観へと高めてくれるのかということを明らかにしようとするのである。

ところで、この作業はかなり順調に進んでいく。メルロ＝ポンティは、『世界の散文』のなかで、言語の意味作用も或る意味では絵画のそれと殆ど異なるものではないということを明らかにするが、それにもかかわれず言語には理性の特権があるのだということも明らかにする。言語は、絵画などとは比較にならない普遍性のうちにわれわれを据え付けてくれるのである。こうして彼は、言語がなぜわれわれを超越論的主観へと変身させてくれるのかを明らかにすることに成功するのである。ところが、言語のもつこのような不思議な力を解明したかに思われる『世界の散文』は、もう少しで完成されるという地点で、突然中断される。そして、しばしの沈黙のなかからやがて晩年のメルロ＝ポンティの異様な思想が姿を現わしてくるのである。してみれば、『世界の散文』が仕上げられていく過程のなかで、それまでは彼が注意して考えようともしなかった何かが突如として彼の頭を掠め、それが『世界の散文』の中断を余儀なくするとと同時に、彼を晩年の思想へと駆り立てていったに違いないと想定しても、決して的外れとは言えないであろう。この何かがメルロ＝ポンティのうちに転回と言ってもよいような出来事を引き起こしたに違いないのである。

が、それでは、彼がそれまで考えてみようともしなかったようなものとは、一体どんなものか。われわれが注目したいと思ったのは、中断される寸前の『世界の散文』のなかで論じられている他人理論である。なぜなら、この理論から生じてくる帰結は、これまでのメルロ＝ポンティの哲学的企投を支えていた基本的主張、つまり鮮明な光景をおのれに与えることがわれわれの身体の本質だとすることによって、客観的世界をもつことをわれわれの身体によってわれわれに課せられる意識の目的論の目標として正当化していた『知覚の現象学』の基本的主張を動揺させずにはおかないからである。実際、メルロ＝ポンティは、この他人理論のなかで、次のようなことを述べている。われわれに始元的に開示されてくる感覚的世界とは、そのなかのすべての対象が物・身体の区別なく、私の身体の類似者として与えられるような世界である。しかもこの世界は、決して完全には乗り越えられることのない世界なのだ、と。してみれば、どうして突き放され、冷やかに眺めやられるような客観的世界をもつことが私の意識の目的論

の目標などでありえようか。むしろ、そうなれば、物を含めた一切の存在者のうちに身を置き、それらを内側から生きるということが、それゆえそれらと優れた意味で共存可能な世界をうち立てることが、私の目的論の目標となるのでなければならない。なぜなら、私が物を含めた一切の存在者のうちに身を置き、それらを内側から生きていたこの始元的世界、メルロ＝ポンティが後に肉の世界と呼ぶことになるこの感覚的世界は、どれほど変様されようとも決して完全には乗り越えられることのない存在論的世界として、その後も私の経験をひそかに規定し続けることになるからである。したがって、この他人理論こそ、転回を引き起こしたものなのである。メルロ＝ポンティは、この理論を通して、自分も「主観－客観」図式を絶対視する近代的偏見に囚われていることに気づいた。だから彼は、他人の身体のみならず、物でさえも自分の身体の一部として生きる「間身体性」という奇妙な思想を根幹に据えながら、あの上昇の道をもう一度辿り直さねばならないと考えるようになったのである。

論文審査結果の要旨

本論文はフランスの現象学者メルロ＝ポンティの思想形成の跡をたどりながら、晩年に生じた「存在論的転回」がいかなる問題意識によって動機づけられていたのかを解明したものである。そのために論者は、メルロ＝ポンティの前・中期に属する著作、講義、草稿等を丹念に読み直し、そこに「転回」を促した決定的動機を探ることを試みる。論文全体は「はじめに」、本論４章および終章から構成されている。

「はじめに」では本論文の目的が簡潔に提示される。すなわち「晩年のメルロ＝ポンティにおいて生じた出来事、転回と言ってもよいような出来事が何によって動機づけられていたのかを明らかにする」という課題である。

第一章「メルロ＝ポンティの思想の原型――『行動の構造』をめぐって――」では、まず人間を生理学的、心理学的、社会学的に規定された存在と見る科学的人間観と、人間をそうした繋縛から自由に自分を含む全自然を公平無私に眺めやる超越論的主観と見なす主知主義的人間観との対立という問題が取り上げられる。論者はメルロ＝ポンティの前期の著作『行動の構造』を、これら二つの人間観を共に可能にしている基盤へ立ち帰ることによってその対立を克服しようとする企てとして位置づけ、その内容を人間行動の構造的理解を目指す「構造の哲学」という観点から読み解くことを試みる。

メルロ＝ポンティは物理的系によって実現される「物理的秩序」、生物によって実現される「生命的秩序」、人間によってのみ実現される「人間的秩序」を区別し、これら三つの構造は相互に還元不可能なゲシュタルトを構成していると考えた。論者はメルロ＝ポンティがこれらを区別すると同時に「再構造化を繰り返しながら次第に統合のレベルが高まっていく唯一のゲシュタルトの運動」として捉えていたことに着目し、この運動を再構造化の反復を通して超越論的主観にまで高まっていく「人間的実存の超越の運動」として特徴づける。『行動の構造』がこの超越の運動を外的観察者の立場から記述したものとすれば、続く『知覚の現象学』はそれを人間的経験の内側から追跡しようとしたのである。

第二章「知覚的生――『知覚の現象学』をめぐって――」では、主著『知覚の現象学』の叙述に即しながら、「生命的構造という破棄しえぬ基盤に立脚しながらも、言語という奇妙な道

具を駆使することで、おのれを超越論的主観へと高めていく社会的存在者としてのわれわれの超越の運動」を解明することが目指される。その際、論者が手がかりとするのは、「世界内存在」としてのわれわれの身体の特異なあり方であり、とりわけメルロ＝ポンティが詳細な分析を行った幻影肢現象とシュナイダー症例である。これらの障害事例の考察を通じて明らかにされたのは、身体はこれまでのあり方に基づけられつつ、おのれを捉え直し再組織化することによって新たなあり方を実現するということ、すなわち身体は超越の運動に貫かれた存在者だという事実にほかならない。そこから、意識とは客観的世界を前にした認識論的主観（私は思う）のような存在ではなく、＜私はできる＞という超越の力を備えた身体存在であることが明らかにされる。＜私はできる＞という運動能力によって把握された世界の根底には、身体によってたどられた「前客観的世界の全厚み」が忘却されることのない過去として沈殿しているのである。

だが、身体は感覚的なものに満たされた前客観的世界を単に受動的に生きているだけではない。諸器官を備えた身体はさまざまな感覚的なものとの間に平衡を樹立しようとして運動を開始する。その運動は、「知覚と行動における最高度の鮮明さ」を目指すのであり、それが終結するのは明瞭に分節化された光景が私に与えられたときである。メルロ＝ポンティはこれを知覚の「規範」と呼び、そこには客観性を目指す「意識の目的論」が働いていると考えた。論者はこの点を重視し、下位の秩序の再構造化を通じて超越論的主観へ向かう超越の運動を支えるものが、この「規範」であり、「意識の目的論」であることを指摘する。そこには客観的世界への道筋が予示されているのである。同時に論者は、客観的認識が可能になるのは「主観的・相対的な人間的世界」を介してであることに注意を促し、人間的世界の基盤となる他人経験の解明へと歩を進める。

第三章「間主観的生――『知覚の現象学』第二部第四章「他人と人間的世界」とソルボンヌ講義「幼児の対人関係」をめぐって――」では、人間的世界の基盤である他人知覚の問題が取り上げられ、それに対するメルロ＝ポンティのアプローチとその問題点が検討される。まず『知覚の現象学』においては、他人知覚は「所作」のレベルで主題化され、他者理解とは私の身体による他人の身体の捉え直しであるという見解が提示される。つまり、他人の身体と私の身体は一つの全体となり、私のものでも他人のものでもない間主観的生の中へと入っていくのである。それに対して論者は、このような理論では、「自己への自己の現前」あるいは「対自」を他人の中に認めることはできず、本当の意味での他人知覚を説明することはできない、と批判する。そして、他人知覚が理論上不可能であるにもかかわらず、われわれが社会的存在であることをどう両立させるかという問題意識こそ、やがてメルロ＝ポンティに彼の思想全体の再編成を促すきっかけとなったことを浮き彫りにする。

次にソルボンヌ講義において再び他人知覚の問題と取り組んだメルロ＝ポンティは、われわれが自他未分化の状態からいかにして離脱するようになったのかを、幼児の発達過程を分析することによって明らかにしようとする。彼によれば、自他の分離が始まるのは幼児が鏡に映った自分の身体を自己の身体像として理解するときであり、そこで行われる鏡像による自己の身体の客観化には、本質的に＜他＞人の了解が含まれているのである。論者は鏡像段階を媒介項にして「癒合的社会性」から「個人的生」への転換を描き出すメルロ＝ポンティの説明を評価しながらも、そこには「彼が他人ではなく、精巧に作られたロボットであるかもしれない（サルトル）」という可能性が究明すべき問題として残されたままであることを指摘する。

第四章「超越論的主観への生成――『知覚の現象学』第一部第六章「表現としての身体とパロール」と『世界の散文』をめぐって」では、間主観的生を新たな段階へともたらし、超越論的主観性への道を切り開く言語の機能について考察がなされる。論者はメルロ＝ポンティの言語論が、二つのベクトルの対立と緊張の上に成り立っていることを明らかにする。すなわち、言語を身体的所作の延長線上で捉えるベクトルと、言語を他の所作には見られない特権をもつものと考えるベクトルとである。『知覚の現象学』で展開された言語論においては、前者のベクトルが優位に立ち、パロールの理解は身体的所作の理解になぞらえられた。つまり、どの語もそれ自体としては決定的な意味をもたず、言葉の意味は文脈によって決定されるのである。

それに対して、『世界の散文』の言語論では後者のベクトル、すなわち言語が間主観的獲得物を構成し、真理の観念をわれわれに据えつける、という特権的側面が強調される。それは、言語とは「語る主体」としてのわれわれの表現要求に応えつつ、みづからを有機的に組織化する諸記号の体系だ、という言語観である。論者はこうした見解の中にソシュール言語学との共通性を見て取り、エディーとともに、一般に言われるほど両者の間に懸隔はないことを確認する。さらに、パロールが開示する世界は志向的歴史のうちに取り集められ、刻印され、保存されることによって準永遠性を獲得し、真理への階梯を上昇する。われわれが超越論的主観性となりうるのもパロールのおかげなのであり、ここにおいて「実存の行う超越の運動」を解明するメルロ＝ポンティの考察は一応の完成を見るのである。

終章「メルロ＝ポンティの存在論的転回――『世界の散文』のなかの「他人知覚と対話」と題された章をめぐって」では、『世界の散文』が完成間近に中断された理由が探られ、そこから晩年の存在論的転回にいたる経緯が明らかにされる。『世界の散文』において三たび他人知覚の問題に立ち向かったメルロ＝ポンティは、他人の秘密を解く手がかりを自他共通の「感覚世界」の中に求める。感覚することにはある種の普遍性があり、私に始原的に開示される感覚世界の対象はすべて、物と身体との区別なく、私の身体の類似者として私に与えられているのである。その意味で、感覚世界とはすでに社会的世界にほかならない。論者は単なる「客観」ではないこの感覚世界のあり方の中に、メルロ＝ポンティに生じた転回という出来事を理解する鍵を見出す。ここでは、「客観的世界」をもつことをわれわれの身体に課せられた意識の目的論の目標と見定めていた『知覚の現象学』の基本構図が根本から揺るがされているからである。やがてこの感覚世界は、いかなる変様によっても決して乗り越えられることのない「肉の世界」と呼ばれることになる。それゆえ、『世界の散文』の他人理論を通じてみずからが囚われていた「主観－客観」図式を自己批判するにいたったメルロ＝ポンティは、他人の身体のみならず物をも自分の身体の一部として生きる「間身体性」の概念を基盤に、晩年の「肉の存在論」へ向けた新たな一歩を踏み出すのである。

以上のように、本論文はメルロ＝ポンティの前・中期思想を他人知覚論と言語論を軸にして克明にたどりながら、『世界の散文』の企図が中途で挫折せざるをえなかった事情を解き明かし、そこに後期の「存在論的転回」を促す決定的な動機を探り当てた労作である。ただ、論述の展開において、前・中期思想を後期思想の観点から逆照射している面が多分にあり、それからすれば後期存在論のより詳細な検討が必要であったと思われる。これは今後の課題とすべき事柄であろう。総じて本論文は、これまで謎とされてきた晩年のメルロ＝ポンティに生じた思想的転回の内実を内在的観点から解明したものであり、現象学研究の発展に大きく寄与するものであることは疑いを容れない。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。